



営農情報

第94号 令和2年4月3日

「あまおう」4月の管理

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

1 生育状況

3月上旬から3番果房の出荷が始まり、3月中旬から出荷量が増加し、現在、3番果房の出荷は終盤となっています。4番果房は3月中旬より出蕾が始まっており、早いほ場では4月上旬から収穫が始まる見込みです。

(JA福岡大城3月20日現在(昨年比) 出荷量98%、単価100%、販売金額98%)

ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類の多発ほ場が増加しており、うどんこ病の発生も散見されています。また、春先の高温の影響で親株の心葉の動きが早く、3月上旬からランナーの発生しているほ場も見受けられます。次年度産に向けて採苗が遅れないよう、早めの作業を心掛けましょう。

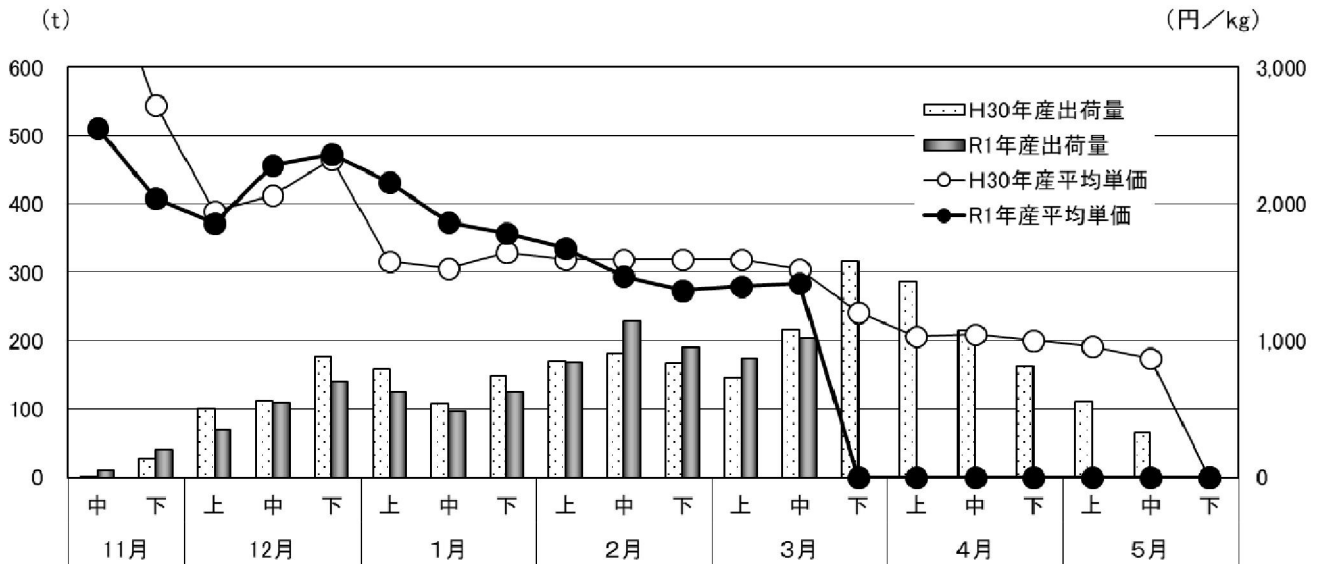


図1 JA福岡大城イチゴ総出荷量と平均単価の推移

2 気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区気象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

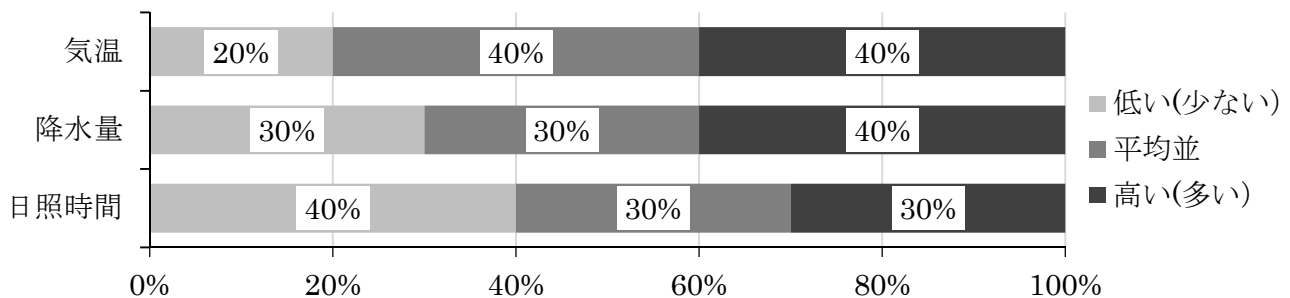


図2 1か月予報 (九州北部地方 予報期間：3月28日～4月27日 発表日3月26日)

(2) 今後の見通し

天気は数日の周期で変わり、気温が高い傾向となっています。ハウス内が高温になり乾燥するとハダニ類の発生が増加する可能性が高くなります。また、親株床が乾燥すると、ランナーの発生遅延が懸念されます。

3 今後の管理

<ポイント>

◎ハダニ類の防除は早めに

気温上昇と乾燥でハダニ類の発生が増加する4月上旬までに防除を行いましょう。

◎傷み果対策

春先の気温上昇に伴い、果実の傷みが発生しやすくなります。玉出し、温度管理、水管理など品質保持対策に取り組みましょう。

◎親株管理・育苗準備

充実した苗を作るためにも、採苗時期が遅れないようにしましょう。適期の親株管理(かん水・追肥・防除など)、育苗準備は計画的に、早めの作業を行いましょう。

(1) 温湿度管理

- ・晴天日はサイド・谷・妻面の換気を早朝から行い、低温で管理する。
- ・夜温7℃以上の日は、夜間もハウスを開放したままにする(雨天日を除く)。
- ・降雨時は、雨が降り込まない程度にサイドや妻面での換気を行い、湿度を下げる。

表1 ハウス内の温度管理の目安

午前	午後	夜間
18～20℃	18℃以下	5℃(夜温7℃以上は開放)

(2) かん水

- ・1回当たりのかん水量が多いと、収穫時の果実傷みの原因となるため少量で回数を多く行う。
- ・かん水後にpF値1.7～1.8を目標に行う。
(朝、心葉が葉つゆをうたないようであれば土壌が乾燥している)
- ・果実品質維持のため、収穫直後にかん水する。
- ・水分不足は、果実肥大不足や乾燥によるハダニ類の多発要因となりやすいので注意する。

(3) 株整理

- ・収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房の出蕾促進のため速やかに除去する。
- ・生育が旺盛になるとランナーが多く発生するので随時除去する。
- ・畝上の過湿を防止するため下葉を除去する。

(4) 果実の日焼け果・煮え果

- ・曇雨天日が3日程度続いた後の晴天日には、果実からの蒸散に水分供給が追い付かないので日焼け果や煮え果が発生しやすい。
- ・曇雨天日後の晴天日は遅れないように換気を行い、急な温度上昇を防止する。

(5) 軟果・傷み果対策

- ・果実に光が当たるように、随時玉出しを行う。
- ・収穫遅れによる過熟を防止するため、部会の着色基準に従って収穫する。
- ・収穫は高温時を避け、収穫箱内での果実の積み重ねを行わない。
- ・収穫後は速やかに予冷し、果実を2時間以上予冷庫で冷やした後に、パック詰めを行う。
- ・収穫後の少量多回数かん水に努める。
(土壌水分の目安はpFメーターで1.7~1.8、軟果が多い場合は2.0程度)
- ・遮光資材(寒冷紗、塗布剤)を活用し、ハウス内の温度上昇を抑える。

(6) ミツバチ管理

- ・最終収穫日の20日前までは放飼しておく。

(7) 病虫害防除

① ハダニ類

- ・下葉の除去後、葉裏や葉縁に十分薬液がかかるように丁寧に散布する。
- ・ハダニの多発した株は、特に強めに下葉を除去した後に防除をする。
もしくは株ごと除去してハウス外に持ち出す。
- ・下葉の除去をしたあとの残渣は、ハウス内に放置しない。
- ・気門封鎖型薬剤の卵に対する効果はほとんど無いため、気門封鎖型薬剤は5~7日おきに複数回散布を行う。

② アザミウマ(スリップス)類

- ・ハウス周辺からの飛び込みで特にサイド側や妻面付近に発生しやすいため注意する。
- ・ハウス周辺の雑草からハウス内に侵入するため、ハウス周辺の除草を行う。

③ うどんこ病

- ・夜温が上昇し、生育が軟弱徒長気味になると発生が多くなる。
- ・電気加熱式くん煙器の活用や、定期的な薬剤散布による予防に努める。

④ 灰色かび病・菌核病

- ・多湿条件で発生が増加するため、曇雨天の前などは予防的に薬剤散布を行う。
- ・発病後は、早急に被害果実を取り除き薬剤による防除を行う。
- ・サイドや妻面での換気や循環扇を活用し、ハウス内の湿度を下げ、結露を抑える。

(8) 親株管理

① 株の整理

- ・親株の負担を軽くするため、不要な下葉および果梗(花蕾)は早めに除去する。
- ・マルチの隙間から出た親株周辺の雑草は、手作業で除草を行う。
- ・異常な葉(奇形葉)のある親株は除去する。
- ・萎黄病の疑いがある株を見つけたら、速やかにJA又は普及指導センターに連絡する。

② かん水・施肥

- ランナー発生期の4~5月に乾燥すると、採苗時期の遅れや採苗本数が少なくなるのでかん水を行う。
- ・特にプランターやポットは乾燥しやすいため、こまめにかん水を行う。

- ・土耕ほ場では排水対策用の溝を整備する。
- ・プランターやポットの場合は、4月上旬までにI B化成S 1号を1株当たり5粒、5月上旬までに1株当たり5～10粒の追肥を行う。ロング肥料の場合は、1株当たり10g程度（窒素成分で1.3g程度）の追肥を行う。

③ 病虫害防除

- ・炭そ病の防除は、7～10日おきに定期的に行う。
- ・ハダニ類の発生が見られたら、速やかに薬剤防除を行う。

特集：イチゴのクルミネグサレセンチュウに注意！！

イチゴのクルミネグサレセンチュウによる被害が増加しています。冬季の高温傾向の影響で、平年なら4月以降に生育不良、萎凋症状が現れますが、今作は12月から被害が発生しています。原因としては、梅雨入り後の長雨、日照不足に加え、7月・8月の大雨によるほ場の浸冠水等により、土壤消毒が不十分であったことが考えられます。来作に向けての対策が必要となるため、下記の被害症状がある場合はJA、もしくは、普及指導センターまでご連絡ください。

【被害症状】

- ・初期症状は、株の生育が止まり、古葉の縁から赤褐色に変色し、しだいに葉の全体が紫褐変する。
- ・根部は、褐変～黒変に変色し、甚だしいと枯死する。
- ・株は根が枯れることにより株がグラグラと動きやすい。



写真1. クルミネグサレセンチュウの被害株

【生態】

- ・産卵は根の組織内で行われ、孵化幼虫は根の中を加害しながら移動し、成虫になる。
- ・根の表皮から組織内に侵入し、養分をとり腐敗させる。
- ・幼虫、成虫ともに根が腐敗したり、条件が悪化すると組織外に出て土壤中を移動し加害を続ける。
- ・土壤消毒の効果が低いハウスの谷、サイドに発生しやすい。
- ・連作により、センチュウの密度が高くなる。



写真2. クルミネグサレセンチュウ

【防除のポイント】

- ・夏の高温期に太陽熱消毒を行う。
- ・薬剤による土壤消毒を行う。ビニル被覆する場合は、サイド部や谷部は薬剤の効果が劣るので、ガス漏れがないようにしっかりと密閉する。
- ・春先に株が立ち上がらない場所は、確認する。
- ・太陽熱消毒又は薬剤による土壤消毒は毎年行う。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！